

「地域のひと・もの・こと」を
教材とした人権教育がしたいな。



そうだ、地域の方々の思いがこもった
あの広場のことを教材化しよう。

人権教育リーフレット

いま ここから

自分から 3

～地域素材をいかして～

学習の出発は、地域の願いと学校跡地

明治五年、学制により制度的には全員が学校
に行くことになった。
しかし、被差別部落の子どもたちは、差別と
貧困のため学校に通えなかった。そこで弥右衛
門さんは、自宅を開放し、自ら教師となり、勉
強を教えた。
その学校は「惟善学校」と名づけられ、長野
県内唯一の、被差別部落の人々がつくった公立
学校と言われている。
厳しい部落差別の中にあっても、教育の重要
性を理解し、協力して「惟善学校」を創立、運
営したことを、地域の方々は誇りに思い、後世
に伝えるために学校跡地周辺を記念広場として
整備した。

差別とたたかってきた歴史を後世に
伝えるために広場をつくりました。



〔第三次とりまとめ〕では、効果的な学習教材の選定・開発について、次のように示しています。

人権が尊重される社会づくりを自らの問題としてとらえ、自ら考えることができるようにするなどの教育効果を高めるため、身近な事柄を取り上げたり、児童生徒の興味・関心を生かしたりするといった教材の内容面での創意工夫を行っていきましょう。

効果的な教材例として、「地域の教材化」「外部講師の講話やふれあいの教材化」「保護者や地域関係者と共に作る教材」「歴史的事象の教材化」「教材を通して、よりよい出会いを作るための教材」などがあげられています。

素材と出会い、授業をつくろう

被差別部落の（お頭）

弥右衛門さんの言葉はすごい。

職員研修で惟善学校跡地を見学しました。

地域の方々の熱い
思いを感じる。

「差別が厳しい中で、読み書きができなければ、将来、被差別部落の子どもたちは、二重に差別を受けなければならない。そんなことはさせたくない。差別されても、賢くなければ、自分自身が成り立ってはいかない。」



厳しい部落差別の中にあっても、地域で協力して「惟善学校」を創立、運営。その歴史を誇りに思い、惟善学校跡地周辺を記念広場として整備し、後世に伝えようとした。

差別された当時の人々の思いや、地域の方々の願いを取り入れて、授業をつくりたい！

子どもたちのために立ち上がった弥右衛門さんをはじめとする地域の方々が、差別とたたかってきた生き方に学ぶことができるのではないかな。

地域教材として、記念広場の見学などの体験的な学習や、記念広場として整備した地域の方々に会うことで、より自分事として学べる教材となるのではないかな。

日常的に起きているさまざまな事柄とのつながりの中で、じっくりと同和問題について考えることができるのではないかな。



国や県は、授業のつくり方についてどう示している？

こんなふうに学習したい

- ①地域教材（地域のひと・もの・こと）に出会い、ふれあう「**実体験**」を通して、はっとしたり、心をふるわせたりするような学習をしたい。
- ②地域教材を通して感じたり考えたりしたことを身のまわりの人たちと気軽に「**対話**」できるようにしたい。また、地域・学校・家庭において、みんなの共通の話題にしていきたい。
- ③地域教材にふれるなかで、自分の見方や考え方、生き方やあり方について「**ふり返り**」たい。
- ④日常的に起きている様々な事柄と「**関係づけ**」て考えていけるようにしたい。
- ⑤地域教材から学んだことを「**活用**」しながら、いま・ここから・自分から行動したい。

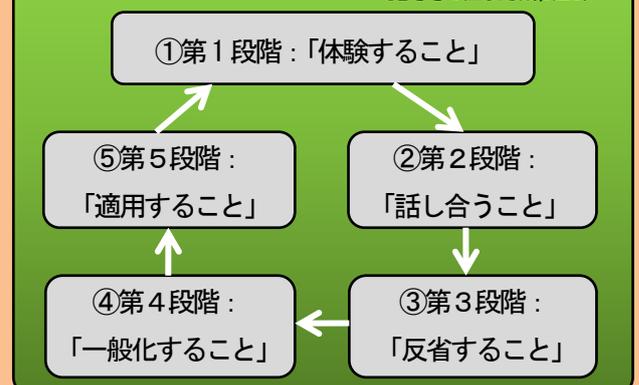
人権教育の指導方法の工夫

【第三次とりまとめ】「**体験的な学習**」に関して

個々の学習者の体験をはじめとして、他の学習者との共同作業としての「話し合い」、「反省」、「現実生活と関連させた思考」の段階を経て、「自己の行動や態度への適用」へと進んでいくと考えられます。

参考：「**体験的な学習**」に関する学習サイクル

（指導等の在り方編p.28）



私の家の近くに新しい広場がある。園児のお散歩コースになったり、神社にお参りする人もいたり、この辺りではいいこの場だ。

前は、「学校場(がっこば)」と呼ばれ、かやぶきの建物があつた。建物の裏には小さな神社がある。広場になる前、その建物はもう崩れかけていたから、近づいちゃいけないよつて言われた。そこが、数年前広場になった。入口には、「惟善学校跡地(いぜんがっこうあとち)」と書いてある。見た目は、神社の前に大きな広場ができた感じだけど、よく見ると、目印が4つ置かれている。そして、大きな看板が立てられている。この4つの目印は、惟善学校の建物跡の四隅に置かれたもので、学校の大きさが分かる。縦6.3メートル、横9メートル、今の学校と比べるとあまりにも小さい。

看板には、「明治になつて、学校には誰でも行けるよつたはずなのに、被差別部落の子どもたちは、差別や費用のため学校に行けなかつた。何度も地域の学校に行けるよつ頼んでもだめだつた。そこで、この地区の「お頭(かしら)」と言われた弥右衛門(やえもん)さんは、自宅と自分の土地を使つて学校にし、子どもたちに勉強をさせよつとした。それが惟善学校で、名前は変わりながらも17年間続いた。」と書いてある。

部落差別は、明治になつても厳しい差別として残つていたことがこの看板から分かつた。調べてみると、県内のほかの被差別部落でも学校に行かせてほしいと願ひ出たのに、そのほとんどのところで学校に行けなかつたらしい。学校に行きたくても行けない子どもたちが、ここにも確かにいたんだ。すごくおどろいた。きっと、近所の子どもたちが学校に通つているのを横目に、学校に行けなかつた子どもたちは、喜んで惟善学校に通つたんだろつな。子どもたちの張り切りよつが目に浮かぶよつだ。

ちょっと不思議だつたのは、なんで、この広場を作るときに、さつきのよつな話を看板で書き残したのだろつということだ。差別があつたことは、伏せておきたいよつて気持ちが働かなかつたのだろつか…。

そこで、この広場を作るときにかかわつた方にお話を聞いた。すると「なんで隠すことがあつる？ この学校場はおれたちの誇りうる歴史だよ。自分たちで学校まで建てたんだよ。どつどつ知つてほしい。」と話してくれつた。

そうか。確かに言われる通り、子どもたちのために、自分たちで学校を建ててしまふなんてすごい。建てつるためには、お金もかかつただろつに。また、先生や教材にかかる費用も大変だつたろつに。教育への熱と、子どもたちへの思ひは何て熱く深いんだ。こんな素敵なたちの歴史を知らせないのは確かにもつたないよつな。そう思ふと私もちょっと誇らしく思つた。

今、私たちは当たり前よつに学校に通つている。でもその昔はこんなにも苦勞しながら教育に光を見出し、大切にした歴史があつたことが分かつた。私は思ふ。決して差別をしなふ、差別をされなふ。そういう世の中にしなふては先輩たちに申し訳ない。おやつを食べる園児の姿に、惟善学校に通つた子どもたちの姿が重なつて見え、私は胸が熱くなつた。



解放子ども会会員の作品

体験的な学習の キーワード

～感じ考え行動する学びへ～

①実体験

②対話

③ふり返り

④関係づけ

⑤活用

①実体験

【学習のねらい】 惟善学校のさまざまなできごとにふれ、自分なりの思いや考えをもつ。

惟善学校跡地を見学する

- 説明の看板や資料を読む。
- 教室の広さを調べる。



こんなにせまい所で勉強をしていたんだね。

なぜ、記念広場になっているのかな？

「あの学校はおれたちの誇りうる歴史だよ」を読む。

地域の方々や資料を作った方のお話を聴く。



県内で唯一、被差別部落の人々がつくった「誇るべき学校」なんだよ。

②対話

友だち、地域の方々、惟善学校のことを調べている方と話をしたい！



【学習のねらい】 相手と語り合う中で、自分の考えを深める。

友だちとの対話

- この地域の方々は、どんな思いで学校をつくり、17年も続けてきたんだろう。
- 学校さえ分けられてしまう部落差別ってなんだろう。
- 差別をしない、差別をされないって、どういうことだろう。



地域の方々との対話

- ここに学校があったことをどう思っているのだろう。
- 自分たちの先祖の思いをどう受け止めているのだろう。



惟善学校を調べている方との対話

- 地域の方々はどうな思いつから学校をつくらうとしたのだろう。
- なぜここに学校を開いたのだろう。
- 学校をつくるのにどんな苦労があったのだろう。





地域の方々

惟善学校の記念広場の造成や看板の設置にあたっては、地域の皆さんからさまざまな意見があり、実際の取組はなかなか進まなかったんですよ。その中には、次のような意見がありました。

賛成 ○

- もっとたくさんの人たちに、私たちの先祖が頑張ってきたことを知ってもらいたい。
- 私たちの先祖が頑張ってきたことに誇りをもとう。
- この広場を通して差別についてしっかり理解してほしい。

どうしたらいいんだろう？

- 考えたこともなかったから…
- 残しておきたい気持ちはあるけど、また差別されてしまうことはないのかな。
- 昔のことなんだから、どちらでもいいよ。

反対 ×

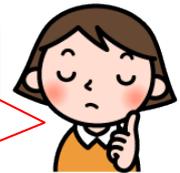
- 私たちの先祖が苦しんできたことをわざわざ知らせなくてもいい。
- ここが被差別部落だとわかってしまう。
- 看板や公園が荒らされるかもしれない。

私はこう考える



差別に立ち向かっていった方々の歴史を放っておくことはできないよね。

やっぱりここが、被差別部落だってわかってしまうのが嫌なんじゃないかな。



差別とたたかってきた当時の人々は、とても大変な思いをされていたんだよ。

惟善学校を調べている方

授業料がかかったため、学校に行かず働いていた子もいたんだ。男子は奉公、女子は製糸工場へ。被差別部落の人々は将来のことを考え、何とか教育を受けさせたい気持ちが強かったんだ。読み書きを身につけ、少しでも安定した収入を得られる職業に就かせたいと考えていたんだよ。



当時の村の役人が、部落の子どもたちを学校に出さないように、説得して歩いたということもあったそうだ。

知らなくて差別してしまうことが、一番おそろしいことなんだよ。だから、正しく学ぶことが大切なんだ。

ただ差別に耐えていただけではなくて、自分たちの力で変えていこうとする強い意志を感じるよ。



③ふり返り

【学習のねらい】これまでの自分の生き方やあり方を見つめ直す。

差別されても立ち上がることは大事なんだな。ぼくも〇〇さんに「それは違うよ」と言ってみよう。

まわりには、悩んだり悲しんだりしている友だちがいる。私は、目をそらさず、こちらから声をかけていきたい。

だまっていたら、いつか差別はなくなるんじゃないかと考えていたけど、それではなんにも変わらないな…話す勇気を私にもてるかな。



「自分さえよければ」と思ってしまうぼくだった。そのことに気づけてよかったな。

私たちは差別についてもっと勉強して、一人ひとりが強い意志を持ちたい！



④関係づけ

【学習のねらい】学習したことと日常の事象と関連づけて考える。



今なお、偏見や差別意識が残っている。どうしてだろう。

【事例1】結婚差別はなくなったの？

あなたのお子さんの結婚しようとする相手が、同和地区の人であると知った場合、あなたはどうしますか。

区分	今回調査 (%)	前回調査 (%)
賛成	8.0	9.9
意志尊重	59.1	66.2
反対・意志尊重	27.0	18.0
反対・認めない	3.7	4.2
絶対認めない	2.2	1.7

※今回調査:H20 前回調査:H13
[人権に関する県民意識調査より]

【事例2】就職差別はなくなったの？

2013年、統一応募用紙制定40周年を迎えました。しかし、残念ながら、今もなお「採用選考において不適切な質問が行われている」という報告がされています。

《不適切な質問》

- お母（父）さんはどんな仕事をしていますか？
- 持ち家ですか、借家ですか？
- あなたの生まれはどこですか？
- 尊敬する人物はだれですか？
- 今、つきあっている人はいますか？

[厚生労働省「公正な採用選考」より]



まず、私が変わらなきゃ。よしっ、私にできることから始めていこう！

⑤活用

【学習のねらい】学習してきたことをもとに、具体的な態度や行動にあらわす。

【事例1 「お年寄りと交流しよう」】

お年寄りに思いを寄せ、お年寄りへの偏見についても考え、お年寄りに寄り添った交流をしよう。

- ・お年寄りの声を聞いて、お互いに楽しめる会にしよう。
- ・「お年寄りには無理」と決めつけていることはなかったかな。

関係資料・副教材等

- ・「まほうの手」(あけぼの・低学年)
- ・「おばあちゃんとお手玉」(あけぼの・中学年)
- ・「おばあちゃんにはムリ？」(あけぼの・高学年)
- ・「高齢者との豊かな交流活動」(人権教育指導資料集)

【事例2 いじめ・命の授業で】

自分と、友だちの命を考える授業で、お互いの命の重みを考えよう。

- ・自分だけの命ではなくて、命は繋がっていることを大事にしたい。
- ・大事なことは、勇気を出して、言葉にして伝えていきたい。



関係資料・副教材等

- ・「そんなこといわれてもなおせないよ」(あけぼの・低学年)
- ・「自分の番」(あけぼの・高学年)
- ・「みわ子の日記」(あけぼの・高学年)

【事例3 教科の授業で】

- ・自分から積極的に声を出して、素敵な合唱をつくりあげていきたい。
- ・苦手な友だちとも楽しんでできる体育にしたい。
- ・授業の中で困ったり悩んだりしている人がいたら、自分から声をかけよう。



関係資料・副教材等

- ・「みんなの前で言えた」(あけぼの・中学年)
- ・「あなたならどうする？」(あけぼの・中学年)

【事例4 社会への第一歩を考えよう

(就職について)】

就職のときの統一応募用紙や面接における差別を考えよう。

- ・統一応募用紙ってなんだろう。どんな理由で統一されてきたんだろう。そのことから差別について考えたい。
- ・就職の時の面接で聞かれてはいけないと教わった質問をされたら、きちんとした態度で受け答えできる強い自分でありたい。

関係資料・副教材等

- ・「ヒューマンライツインながの」(高等学校向け)

【コラム】識字学級で学んだあゆみさん



現在87歳のあゆみさん(仮名)は、小学校の頃、家の仕事の手伝いを優先させられたり、学校で差別を受けたりしたため、ほとんど学校へ行けませんでした。結婚して、字の読み書きが思うようにできないことを大変不便だと感じていた時に、字を学ぶ「識字学級」ができました。字を学ぶことが「楽しくて楽しくて」一生懸命通いました。「はじめは、字を知らないことを知られたくなくて小さいノートを隠すように書いていました。字を覚えるうちに、ノートがどんどん大きくなり、そのうち人に見られるのがいやでなくなりました。」と語っています。

コラム

受け継がれる保科百助校長先生のおもい ～すべての子どもが通い、学べる学校づくり～



長野市立大豆島小学校の中庭には、立派な土俵があります。大豆島小学校では昔から相撲に取り組んで来ました。第2代校長の保科百助先生が、からだとからだをぶつけ合うことで心もからだも鍛えられると相撲を始めたと言われていています。今でも大豆島小学校では、体育の授業で相撲が行われています。学年ごとに相撲大会も行われており、中庭は応援の大歓声と取組をした友だちを称える拍手が鳴り響いています。また、希望者は各種相撲大会に参加しています。大会前には相撲クラブが発足し、朝から四股を踏んだり、ぶつかり稽古をしたり、活気にあふれています。



明治32年、保科百助先生は、学校の周りに樹木がなかったことから、大豆島村各戸から樹木の寄付を求めて植樹を行い、学校環境を整えました。その中にあったのがこの「あすなろ」であり、校庭に面するほぼ中央の位置に植えられました。この「あすなろ」は、堅くて強いこと、ねじれたり曲がったりしないこと、木目が細かく、シロアリを寄せ付けないことなど、丈夫な木です。そのことから、学校が永遠に発展し、そこに学ぶ子ども達が丈夫な子に育ってほしいとの願いが込められています。この木は学校のシンボルとなっています。

6月と11月に行われる「友だち集会」では、代表の学級が人権の学習で取り組んだことや日常生活から感じた友だちや自分のよさなどを発表しています。2年生は隣保館を見学した時に聞いた保科百助先生の話から、みんなで考えたこと、確かめたことを発表しました。「友だち集会」は、保護者や地域の方々も聞いています。発表を聞くことは、立ち止まって、自分の人権感覚を見返す絶好の機会となっています。



たことを発表しました。「友だち集会」は、保護者や地域の方々も聞いています。発表を聞くことは、立ち止まって、自分の人権感覚を見返す絶好の機会となっています。

